

論文要旨

在日中国人留学生の異文化適応に関する研究

—パーソナリティ特性の視点から—

人間発達科学専攻 孫怡

本論では、近年、日中大学間の連携が進み、交換留学制度で来日する中国人留学生が増加していることを社会背景に、Berry の異文化適応理論と Hobfoll のリソース理論を踏まえて、パーソナリティ特性の視点から、在日中国人留学生の異文化適応について検討を行なった。

本論の目的：①留学志向によるパーソナリティの特徴、②異文化体験によるパーソナリティの変容、③異文化適応の実態、④異文化適応に影響を及ぼすパーソナリティ要因及びそのメカニズム（パーソナリティと異文化適応の間における内的・外的リソースの媒介作用）、を検討することを目的とする。

研究方法：留学直前から留学1年後まで在日中国人留学生のパーソナリティ特性、内的・外的リソース、異文化適応について4時点の追跡調査を行い、得られた横断データと縦断データを用い、全部で9個の研究を通じて中国人留学生の適応状態およびその関連要因を検討した。

研究結果：本論の第I部では、それぞれ留学前と留学中の時点で、在日中国人留学生のパーソナリティを測定し、留学志向によるパーソナリティの特徴と留学経験によるパーソナリティの変化について検討を行った。留学志向者のパーソナリティ特徴を検討したところ、「留学志向有り」の人が「留学志向無し」の人より損害回避が低く、固執性、自己志向および協調性が高いという特徴が示された。つまり、留学というリスクの多い道を選んだ人のパーソナリティにおいて、①リスクやストレスから回復しやすい、②目標達成するまで諦めない、③意志や責任感が強い、④社会受容性や協力性が高いといった強みが見出された。そして、異文化環境に適応していく過程の中には、パーソナリティにおいて様々な変動が見られた。個人内と個人間の比較結果を合わせて見ると、留学1年目の間に、多くのパーソナリティ特性（特に性格特性）において有意な変化が見られた。しかし、留学1年後は、やや回復する傾向が見られた。異文化適応していくうちに、パーソナリティが元に戻る可能性が考えられる。

第II部は在日中国人留学生の適応状態とパーソナリティとの関連を検討した。留学1年目の適応状態を追跡観測した結果、社会文化的適応は滞在期間が長くなるにつれて向上したことが見られた。一方、状態不安は留学半年後に有意に高まったことと、自己効力感は留学1年後に有意に低下したことから、留学後に心理的適応状態が低下することが示唆されたと言える。しかし、滞在期間と異

文化適応の関連について、Lysgaard (1955) による異文化適応のU型曲線仮説は確認できなかった。一方、心理的適応（自己効力感、状態不安）と社会文化的適応との間に強い相関があることが検証され、仮説した「自己効力感→社会文化的適応→不安（自己効力感の低下が社会文化的適応の低下につながり、社会文化的適応の低下が状態不安を高める）」という影響の流れも認められた。

パーソナリティと異文化適応の関連について、相関関係を分析した結果、損害回避が低く、固執、自己志向および協調性が高い人の適応状態がよりよいことがわかった。よって、第I部で見出された留学志向者のパーソナリティの強みは確かに良好な異文化適応につながることを実証された。そして、因果関係の分析結果によって、留学前の新奇性追求、損害回避、固執および自己志向が留学後の適応状態を予測することが分かってきた。

適応していく過程に必要なリソースの獲得が重要な一環であると想定し、異文化適応におけるリソースの働きを検討した結果、パーソナリティと異文化適応の間における内的リソース・外的リソースの媒介作用が検証された。

以上から、異文化適応の変数、社会文化的適応と心理的適応の間に強い相関が見られたが、留学1年目の間に、社会文化的適応は滞在期間が長くなるにつれて向上したが、心理的適応は低下しているといった異なる適応過程が分かってきた。両者と関連するパーソナリティ特性も異なることが明らかとなり、Ward(1996)による異文化適応の分類を裏付けることができた。一方、留学生のパーソナリティ特徴も検討したところ、留学生の中にそもそも異文化適応に有利な気質・性格を持っている人が多いことが分かった。よって、留学過程の中で一時的に適応状態が低下しても、彼らのレジリエンスが期待できると考えられる。

また、パーソナリティがリソースを媒介して異文化適応に影響を及ぼすことが示され、文化受容前に既存している要因（FPA）と文化受容中に生じる要因（FDA）との関連性が検証され、異文化受容理論（Berry, 2006）の検証と発展に貢献した。さらに、内的リソースによる外的リソースへの影響が確認され、Hobfoll (1989)によるリソース同士の相互影響を実証することが出来た。

一方、適応状態の変化とともに、1年目の間に留学生のパーソナリティにおいても変化が見られた。しかし、1年後には各気質・性格特性が元の水準に戻るU型曲線傾向が示唆されたことから、パーソナリティの発達性と安定性研究に新しい知見を提供した。